

財団法人日蘭学会 渉外・学芸担当
イサベル・ファン・ダーレン

日蘭関係は 1600 年オランダ船デ・リーフデ号が豊後国に到着したことから始まるとも言えるが、正式な形としては、オランダ人が平戸に商館を設立して以来となる。彼らが 1641 年に、鎖国政策の一環として商館を長崎・出島に移転させられて以来、幕末開国まで 2 世紀以上にわたって交流が続けられた。彼らオランダ人とは、1602 年に設立され、世界最初の株式会社とも言われているオランダ東インド会社 (VOC) の職員であった。VOC のアジア本部はジャヴァ島のバタヴィアに置かれ、そこから会社貿易ネットワークの極東にあった出島、アジア各地の商館の運営を監督した。それぞれの商館の事態を把握するため、商館長には公務日誌の作成が義務づけられていた。毎年その日誌と多岐にわたる帳簿類をバタヴィアに送り、バタヴィア総督がその資料に基づいて、オランダにいる VOC 経営管理者に報告をし、またそれぞれの商館に宛てた次年度の指示をも出した。

出島商館の史料は、今でもほとんど完全な形でハーグ国立古文書館に存在している。その中の「出島商館長日記」は、日蘭貿易だけではなく、日本国内の事情を知るためにも貴重な史料である。「日記」にはオランダ人がもっとも頻繁に関わった蘭通詞たちから聴いた、日本側の史料に見られないような情報や噂までもが記されている。また、毎日の天気も記されているため、最近では、気候変化の研究にも役立っている。「日記」からは江戸時代における日蘭文化交流の具体的な様相も窺える。部分的な日本語訳や日記細目版からだけでも、思いがけない情報を得ることが出来るのである。

日蘭学会は 1975 年 1 月、日蘭両国の文化・学術の研究および文化交流に寄与することを目的として設立された。

江戸時代の日蘭関係史関連の主な刊行物は、

- ・岩生成一監修『和蘭風説書集成』上・下、吉川弘文館、1976-1979 年、
- ・日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版、1984 年、
- ・日蘭学会編・日蘭交渉史研究会訳注『長崎オランダ商館日記』1-10 (1800-1823 年)、雄松堂出版、1989-1999 年、
- ・*The Deshima Diaries - Marginalia 1700-1740 と 1740-1800* (英文「出島日記細目」)、日蘭学会、1992 年、2004 年、
- ・日蘭交流 400 周年記念論文集『日蘭交流 400 年の歴史と展望』、日蘭学会、2000 年、などである。

その他に『日蘭学会会誌』と「日蘭学会通信」の定期刊行物を発行し、オランダ語講座を開いている。

『長崎オランダ商館日記』以外の翻訳としては次のものがある。

- ・永積洋子訳『平戸オランダ商館の日記』(1627-1641)、I-IV、岩波書店、1969-1970 年、
- ・村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記』(1641-1654)、I-III、岩波書店、1956-1958 年、
- ・東京大学史料編纂所訳『日本関係海外史料 オランダ商館長日記』(1633-1649)、東京大学出版会、1974-2007 年。